令和４年度　岐阜県現代陶芸美術館　美術品等収集委員会　議事録

日時：令和４年 12 月 15 日（木）14：00～15：30
場所：セラミックパーク MINO１階小会議室、地下１階収蔵庫前

出席者

○委員	伊藤嘉章	愛知県陶磁美術館総長、町田市立博物館館長
	唐澤昌宏	国立工芸館館長
	外舘和子	多摩美術大学教授、美術評論家
	橋本麻里	ライター・エディター、永青文庫副館長
○事務局	石﨑泰之	館長
	林佳孝	副館長兼総務部長
	長瀬勇	課長補佐兼係長（総務担当）
	寺井富之	主査（県民文化局文化伝承課）
	小栗祥吾	学芸部長
	岡田潔	課長補佐（学芸担当）
	飛彈一成	課長補佐（学芸担当）
	花井素子	係長（学芸担当）
	立花昭	主査（学芸担当）
	山口敦子	主任（学芸担当）
	林いづみ	主任（学芸担当）

議事録

■小会議室にて

林副館長　本日はお忙しいなか、ご出席いただきありがとうございます。岐阜県現代陶芸美術館令和４年度美術品等収集委員会を開催いたします。

～委員・事務局員を紹介～

それでは、これより委員会の進行につきましては石﨑館長が行います。

石﨑館長　年の瀬の大変お忙しいなか、お越しいただきありがとうございます。まず、書面にて開催させていただきました桑田卓郎氏の《陶木》につきまして、ご審査いただきありがとうございました。9 月 16 日に岐阜県知事が出席し、除幕式が行われました。御礼申し上げます。本日は、購入、寄贈作品併せて 21 点を審査いただきます。購入はうち 13 点です。これらの作品については、説明をお聞きいただいた後に、場所を変えて実際に作品をご覧いただき審査いただきたいと思います。それでは、収集候補作品について、小栗学芸部長よりご説明させていただきます。

小栗部長　今回の委員会の進行手順についてご説明いたします。収集作品について、お手元の資料をもとに、調書内容のご説明をさせていただきます。その後、収集作品を設置してあります場所へ移動いただき、1 点ずつ作品を確認いただきます。その後、この部屋に戻りまして皆様よりご意見をいただき、まとめたいと思います。本年度の収蔵候補作品は、購入 13 点、寄贈 8 点、計 21 作品です。まずは当館の収集方針について簡単にご説明申し上げます。

～収集方針の説明～

それでは、候補作品について説明させていただきます。（以下調書に沿って説明）

〇購入作品　調書内容の抜粋

〇寄贈作品　調書内容の抜粋

以上、購入作品 13 点及び寄贈作品 8 点の説明になりますが、別件本年度寄贈済みといたしまして桑田卓郎作《陶木》については、現在セラミックパーク MINO の回廊突き当り、3F 玄関前に設置しております。急なご依頼で大変申し訳ございませんでしたが、委員会の書面開催により皆様のご意見を頂戴いたしまして、当館に収蔵ののち展示、そして 9 月 16 日の開館 20 周年記念における寄贈除幕式となりました。すでに郵送文書をもって報告しておりますが、確認とさせていただきます。また、岐阜県美術館と陶磁器の収集にかかわる情報交換をしておりますが、本年度の岐阜県美術館の陶磁器収集に関して情報提供はございませんでした。よって本年度は、情報交換にかかわる資料もございません。

石﨑館長　それでは別会場へ移動し、実際に作品をご覧いただきながらご確認、ご検討いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

■収蔵庫前にて

（十三代 三輪休雪　No. 1）

石﨑館長　最初に黒田陶苑で発表したものから少しずつ変わってきている。最近は、岩ではなく木の根っ子のようなものがでてきている。

外舘委員　お茶人を試す茶碗。

橋本委員　茶筅が届かないのではないか。

石﨑館長　特別な長い茶筅を作ってもらっている。

唐澤委員　見込みをみると、きちんと茶碗になっている。壽雪さんもそうだが、三輪家は印籠蓋なのか。

石﨑館長　皆同じ蓋である。

（藪明山　No. 2）

立花学芸員　いわゆる良く知られる藪明山ほど描き込みがない。どのような理由か色々と検討した。仮説ではあるが、アール・ヌーヴォー期をどう乗り切ろうかというなかで、細密画を用いながらも構成でみせるということもあるか。ハリリ・コレクションをみても比較的後年にシンプルなものが出てくる。そういったことも考えられるかと思う。

伊藤委員　この作品は収集方針の 3（産業陶磁器）なのか。宮川香山なども 3 か。

立花学芸員　当館では 3 である。

伊藤委員　1 の考え方もあるのではないか。収集方針が 19 世紀末からになっている部分が少し変われば、もっと分かりやすいか。藪明山の場合、［区分が］難しい部分もあるだろうが。

石﨑館長　1 の考え方もある。

外舘委員　評価額が比較的安いように感じた。

立花学芸員　描き込んであるものだと桁が一つ違う。

外舘委員　貫入も少し控えめである。

立花学芸員　まだ研究が進んでいないが、京都の生地なのか薩摩の生地なのかなどが分かってくると、その辺りの意味合いが明らかになってくると思う。

（桝本佳子　No. 3, 4）

唐澤委員　桝本さんらしい作品。

伊藤委員　同じ人の作品とは思えない。

山口学芸員　No. 3 と 4 では制作年に 10 年ほど開きがある。

唐澤委員　一体になっているから設置が楽で良い。

外舘委員　学生の頃は宮川香山からの影響が強かった。

唐澤委員　デコラティブな世界に浸っていた。

山口学芸員　現在は鍋島など磁器の世界も探求している。

（安永正臣　No. 5, 6, 7）

伊藤委員　実際に作品をみると No.5 とその他の作品の価格の差が分かってくる気がする。

外舘委員　この方は手法が謎な部分がある。

橋本委員　釉薬を手捻りする？

山口学芸員　釉薬がボディ。釉薬で造形して、カオリンや石に埋めた状態で焼成し、それらを省いていく。

伊藤委員　伊藤赤水さんのようだ。

石﨑館長　鋳物ですね。

伊藤委員　No.7 も基本的には同じ技法か。

山口学芸員　同じである。
伊藤委員　　こちらはもっと形を作ろうとしている。随分異なる。
山口学芸員　溶けをみせるタイプと造形をみせるタイプとがある。
外舘委員　　No.7 は実際に金継ぎしているのか。
山口学芸員　金継ぎしている。海外での発表が多いことも関係しているかもしれない。日本的な要素を求められることも多いと推測される。
伊藤委員　　現代美術で割れたものを元に戻すことに価値は認められているのか。中国人は《馬蝗絆》をみて、割れた瞬間に価値がなくなるものに、なぜ価値があるのか解らなかったという。
唐澤委員　　最初からコンセプトとしてあれば成立するのではないか。実際形に無理がある。
伊藤委員　　逆に良く焼けるものだ。実際、石など焼けないものも沢山あるはずである。
唐澤委員　　やはり穴が開いていたりもする。
外舘委員　　ギリギリ成立している部分もあるようだ。
山口学芸員　最初は小さなサイズしか作れなかったという。
外舘委員　　実際の強度は気になる。

（酒井博司　No. 8）
伊藤委員　　個人的に酒井さんは才能があると思うが、なぜこの作品なのか。少し前の壺や膨らんですぼまる形のものの方が良い。外側と内側について考えられていない。酒井さんがもう一つ違う世界を作ってくれたら、美濃にとって大きいと思う。この 5、6 年変わってないのでは。もっとできると思う。こちらの作品の購入は構わないが、次に買うものは別の世界のものだよと作家に示す必要はあるのでは。酒井さんや若尾誠さんは、もう一つ変わったところの世界をみてみたい。二人とも良いものをつくる。
外舘委員　　酒井さんの他の作品も収蔵しているか。
花井学芸員　丸みのある藍志野を収蔵している。
唐澤委員　　梅花皮を出すために、温度が難しい。脆いものもある。取扱いは注意が必要。

（セーヴル　No. 9）
唐澤委員　　なかなかのサイズ感だ。
立花学芸員　通常バックスタンプは底にあるが、台座をつけることを想定していたのか本作では口元にある。硬質磁器であることや制作年が分かる。セーヴルは変わったことをやっているので、彩色などについては分からない部分も多い。
伊藤委員　　いわゆる江戸時代までの定番のやきものの名称の付け方と合わなくなる。どういう付け方が一番良いのか。

外舘委員　　この地域は下絵が盛んなせいか、色絵を上絵という傾向にある。
立花学芸員　おそらく近世において［上絵を］あまりやっていなかったので、近代になってからの意味付けでそういう名称があるのではないかと思う。セーヴルは不明な点もあるので、付けられないという側面もある。

（ロイヤルドルトン　No. 10）
立花学芸員　モダンデザインの系譜といいながら、アール・ヌーヴォー期以降から現在までが断絶している。その部分を埋めるものでもある。
外舘委員　　アール・デコからミッドセンチュリーまで一つの線ができたかたちか。

（ロイヤルドルトン　No. 11）
橋本委員　　狐が正面を向いているのが面白い。
伊藤委員　　顔の向きがそれぞれ違う。
唐澤委員　　この６客はどういう組み合わせなのか。
立花学芸員　オリジナルの組み合わせでない可能性もある。というのも、カップのうち 2 点のみ転写でそれ以外は手描きである。人気のある製品であったため、製造されていた期間も比較的長い。
伊藤委員　　良い調書だが、型成形である点が抜けている。

（ロイヤルドルトン　No. 12）
唐澤委員　　日本の何かが参考になっているのでは。
伊藤委員　　そのような感じがする。
立花学芸員　柳であればウィーロー・パターンのなれの果てかという気もするが。
唐澤委員　　不思議な組み合わせである。
伊藤委員　　ありえない色彩である。柿右衛門もありえない色彩を用いる。

（ウェッジウッド　No. 13）
外舘委員　　手描きなのか。
立花学芸員　手描きである。
伊藤委員　　裏に茶色で書いてあるものは何か。
立花学芸員　製作年かペインターのサインか、判然としない。

（金子潤　No. 14）
伊藤委員　　これは平置きするものなのか。
唐澤委員　　壁掛けだろう。
伊藤委員　　裏の出っ張りは「脚」という感じが強い。

花井学芸員　脚にみえる部分にワイヤーがつけられる仕様である。
唐澤委員　　脚にワイヤー用の穴があるのか。
花井学芸員　穴はない。持ち主は［縦ではなく］横にして飾っていたかもしれない。
伊藤委員　　焼くときに、実際脚にしていたのではないか。
唐澤委員　　裏の処理などに日本人らしさは感じられない。制作はもうできない状態であるが、今なら金子さんも元気なので、スタジオに連絡すれば色々と分かるのではないか。

（若尾利貞　No. 15）
林学芸員　　独立してすぐの頃の作品。松坂屋の個展で現所蔵者の父が購入している。
唐澤委員　　珍しいのでは。
外舘委員　　初々しさを感じる。
伊藤委員　　自分の世界を作らなければという前の段階か。
林学芸員　　すでに収蔵しているものは、いわゆる若尾利貞先生らしい鼠志野の板皿。
唐澤委員　　加藤唐九郎なども［若尾家を］訪ねているのではないか。
林学芸員　　利貞先生からそのように聞いている。［良い土を使っていたこともあり、］「どこの土を使っているのか」など、尋ねられたということである。

（井上雅之　No. 16～18）
唐澤委員　　茨城での展覧会出品作から選んだのか。
石﨑館長　　茨城に入る作品が既に決定していたので、それ以外から選んでいる。
外舘委員　　若い頃の作品があるのは、文脈の説明にも良いのではないか。
石﨑館長　　この頃の大きな作品はすでに収蔵している。大きな作品はなかなか展示の機会がない。
唐澤委員　　No. 17 などは女性でも持てるので、［展示が容易で］良いのではないか。
伊藤委員　　自分たちで展示できるという点も大きな要素になるか。

（林康夫　No. 19～21）
石﨑館長　　航空隊に入っていて、日中飛ぶと目標になってしまうので、夜間に無灯火で訓練をしていたという。そのイメージが 80 年代初め頃からのシリーズになっている。
唐澤委員　　No. 21 は良い作品に思う。

（書面審査の桑田作品《陶木》についても実見）

■小会議室にて

石﨑館長　それでは、ご覧いただいた作品についてご意見、ご質問などございますでしょうか。購入、寄贈作品について、作品の価格も含めてお一人ずつご意見を頂戴したいと思います。

伊藤委員　作品を実際に見せていただくと納得する部分があった。たとえば価格にもかかわって、書類だけで拝見したときに、安永さんの No. 5 と 6 で、似たような作品でなぜこれほど価格が違うのだろうと思ったが、作品を見るとそういう差というものがあるのかなと感じた。また、No. 10, 11, 12, 13 というように、どのようなことを考えて集めているのかが非常に見えてくる。良いコレクション形成が出来ているように思った。

唐澤委員　学芸の方が、現状のコレクションと、今後どういう風に構成していくかということをよく踏まえて集められているなと思った。現代陶芸美術館と謳っているだけあって、新しいところにしっかり目を配っているので、羨ましい思いもある。これから評価が定まっていくであろう人たちにも、しっかりと目を向けて、コレクションをしていくという姿勢が良いと思った。また、井上さんや林などは、陶芸史をつくっていく作品であり、このチョイスも素晴らしいと思った。個人的には、若尾さんの《志野花器》が良いと思う。この時代のものは意外と制作年が分からないものが多い。こちらははっきりと 70 年代と分かっている。今後若尾さんを検証していく上でも、キーになる作品となるのではないか。

外舘委員　しかるべきコレクションを、穴を埋めていくというか、陶磁史を作っていく根拠が明確で、非常に良いコレクションになっていると思う。寄贈については、今後価値が高まっていくものもあるだろう。

橋本委員　しばらくこちらの評価委員を務めさせていただくなかで、大きな振れ幅のなかでしっかりと作品を選んでいらっしゃる。コレクション形成もポリシーをもって取り組んでいらっしゃる。そして、毎年一定のボリュームをもってコレクションに加えていらっしゃるというのが、近年の色々な厳しい状況のなかでは難しいことだとは思うが、それを続けてらっしゃるのは頭が下がる思い。個人的には 80 年代生まれの若手・中堅のこれからの作家について、面白い人がいるなと驚きをもってみていた。

石﨑館長　購入 13 点、寄贈 8 点、合計 21 点の収集についてご賛同いただいたということでよろしいか。

（No. 1~21）すべて異論なし。

石﨑館長　すべての作品についてご賛同いただきましたので、収集方針に基づきまして今回の候補作品を収蔵していこうと思っております。以上をもちまして本日の委員会の議事はすべて終了いたします。委員の皆様、ありがとうございま

した。

林副館長　改めて委員の皆様ありがとうございました。当館は約 10 ヶ月の改修工事を終了し、9 月 17 日より開館 20 周年を記念し、3 つの特別展を順次開催しております。現在は特別展として「愛のヴィクトリアンジュエリー」展を開催。企画展といたしまして、安藤基金コレクションをはじめとした収蔵品を展示しております。なお、プロジェクトルームにおいては、昨年開催の国際陶磁器フェスティバル美濃でグランプリを受賞されましたマ・ホイヤーさんの作品展も開催しております。お時間がございましたら、是非ご覧いただけましたら幸いです。以上となりますが、今後とも当館の運営、事業につきまして、ご支援賜りますよう重ねてお願い申し上げます。本日は大変お忙しいなか、ありがとうございました。